

立ヶ花西原遺跡
発掘調査報告書

1998

中野市教育委員会

立ヶ花西原遺跡 発掘調査報告書

1998

中野市教育委員会

第 I 章 遺跡の概要

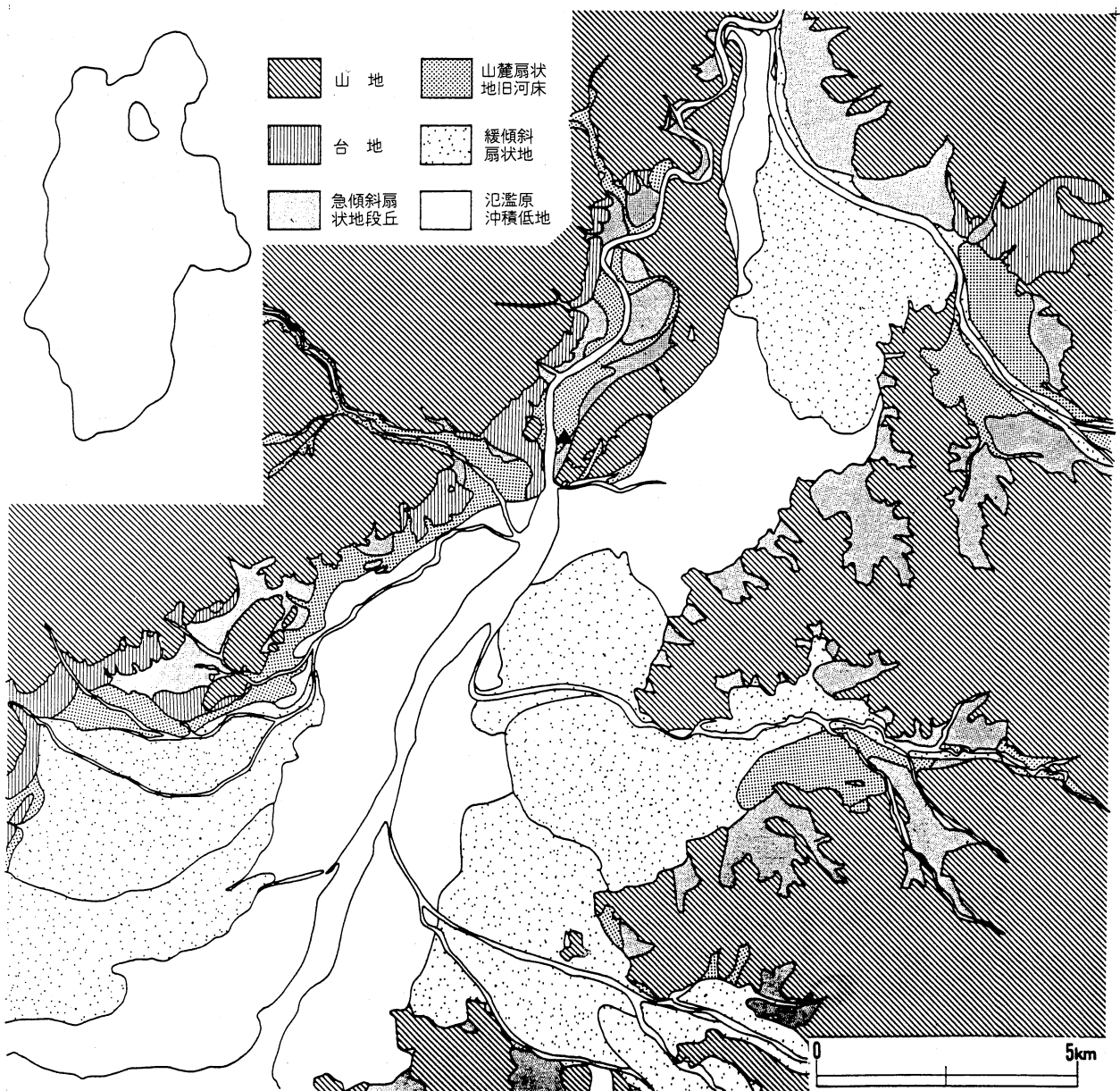
第 1 節 発掘調査に至る経過

近年の道路交通網整備事業は、多くの物資及び情報の交流を行うとともに、地域発展の重要施策と考えられ、全国的に推進されている。

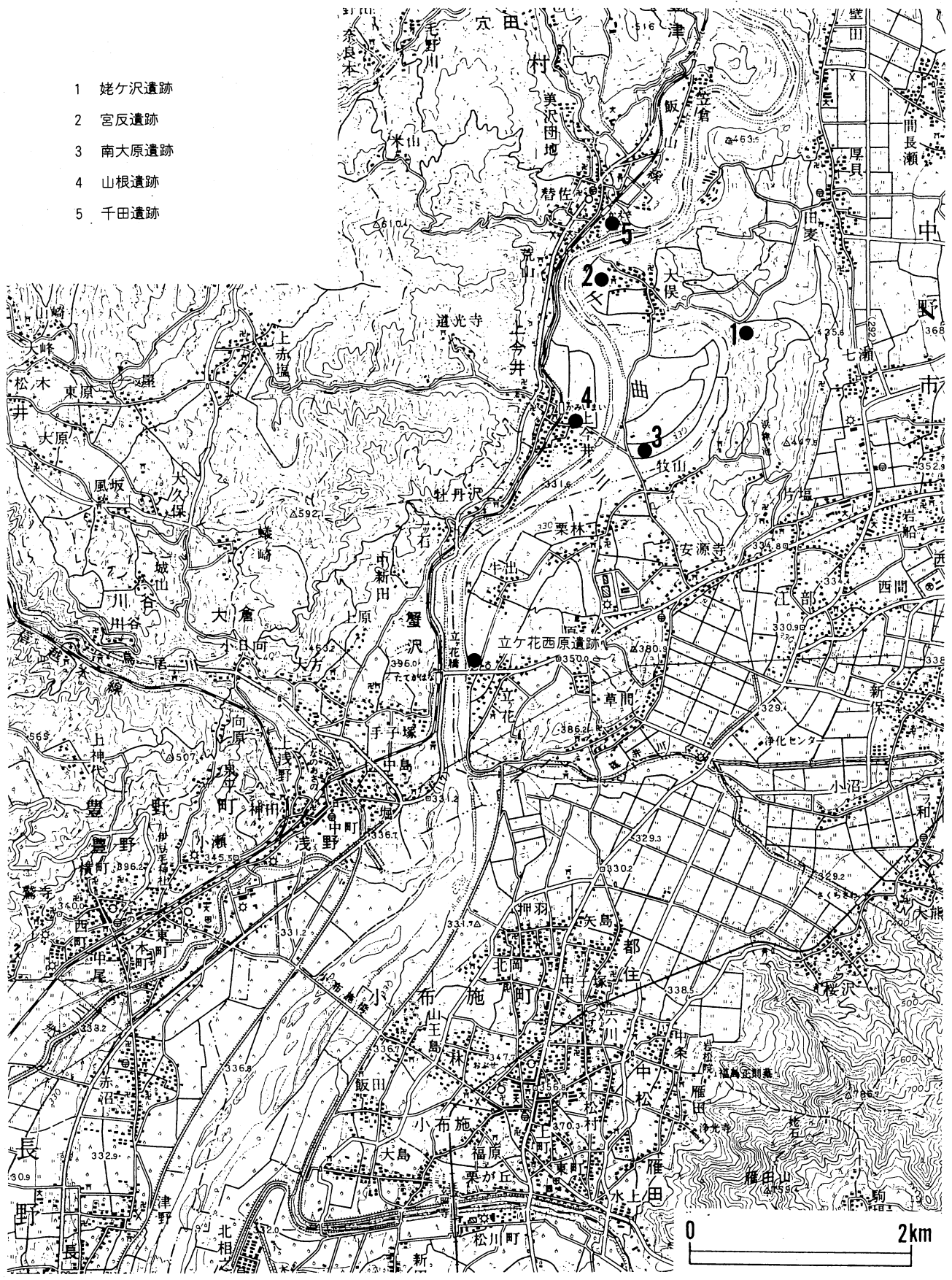
長野県内においても、高速自動車道並びに北陸新幹線の建設が完了し、当市でも上信越自動車道並び

に信州中野インターチェンジが開通運用開始された。この高速自動車道建設に伴う既存道路等の整備事業が現在も進められている。

今回の調査は、中野市立ケ花西原における店舗建設工事に伴うもので、工事予定地が遺跡の範囲内にあり、この埋蔵文化財保護のため、この工事によって破壊される恐れのある箇所について実施されることとなった。



第 1 図 遺跡位置 (1)



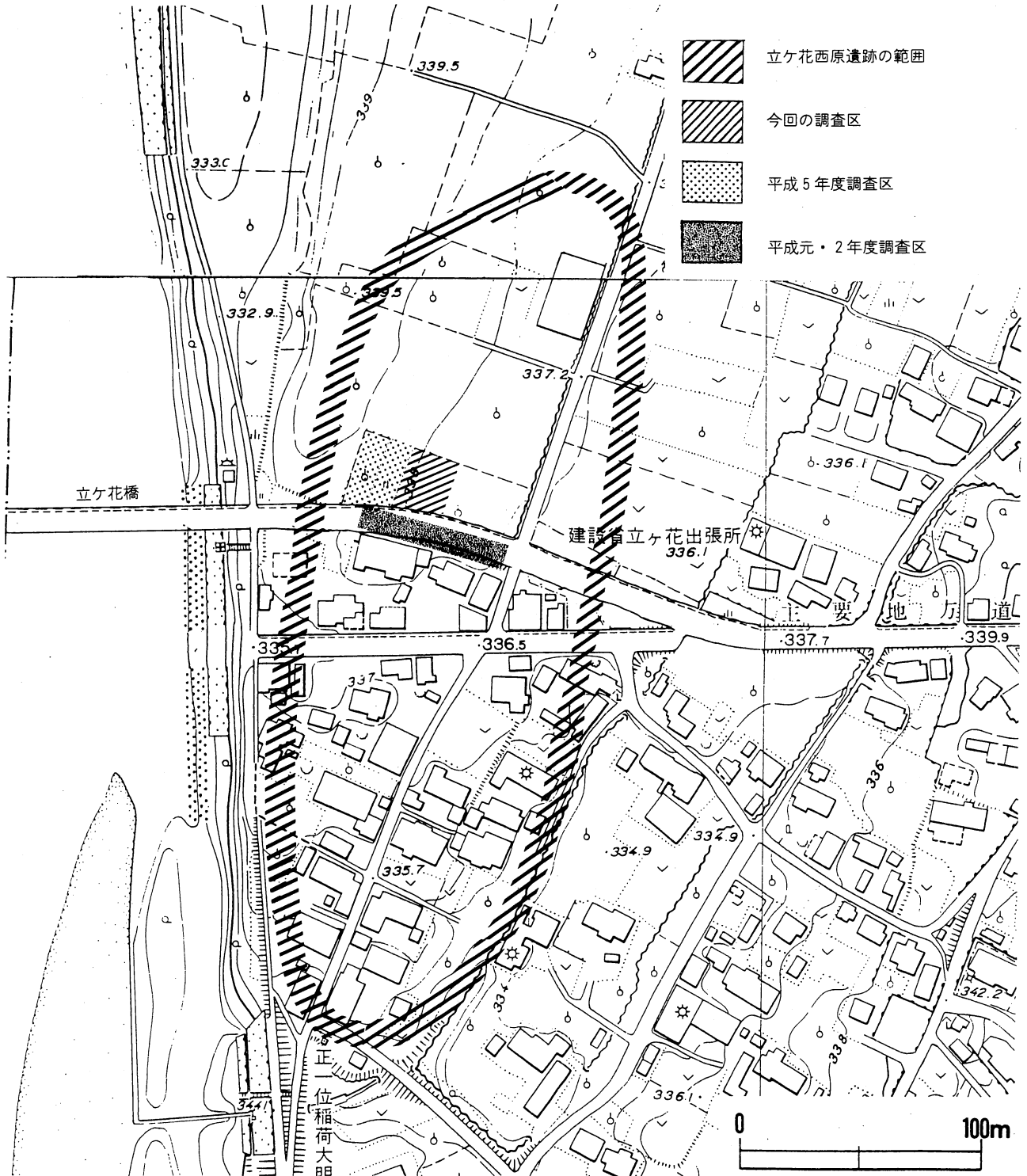
- 1 姥ヶ沢遺跡
- 2 宮反遺跡
- 3 南大原遺跡
- 4 山根遺跡
- 5 千田遺跡

第2図 遺跡位置 (2)

第2節 遺跡の位置と立地

長野盆地は南北30km、東西10kmに及ぶ広大な沖積平野をもち、中央部には千曲川が北流する。長野市南部で千曲川と犀川が合流し、新潟県境までを千曲

川と称し、日本海に流入するまでを信濃川と称している。長野盆地は中野市付近で急速にその幅を収束し、盆地のほぼ中央を北流してきた千曲川は盆地の北西を画する山地の裾部を嵌入蛇行しながら北流する。両岸には何段かの河岸段丘が形成され、嵌入に



第3図 遺跡の範囲と調査区

より北西部の山地裾部は東西に分断され、東岸側は千曲川に沿って延びる細長い丘陵地形となる。(第1図)

中野市は長野盆地の北端に位置し、盆地の東西を画する山地が狭まり、長野盆地が収束する部分にあたる。北に向かって収束する東西の山地地形、その山麓に形成された急峻な小扇状地、収束する山地間の沖積面全体を覆うように形成された扇状地(東側山地から流れる河川による)、その扇状地の扇端を画するように南北に延びる丘陵(長丘丘陵)、扇状地の南側に位置し長野盆地に面する沖積低地(延徳沖)などから構成される。

立ヶ花西原遺跡は主に縄文時代前期後半と古墳時代前期の複合遺跡であることが今までの調査により明らかになっている。

その他、中野市大俣の姥ヶ沢遺跡、宮反遺跡、豊田村上今井の南大原遺跡、山根遺跡、豊田村替佐の千田遺跡など、千曲川に沿った河岸段丘上に縄文期の遺跡が報告されている。(第2図)

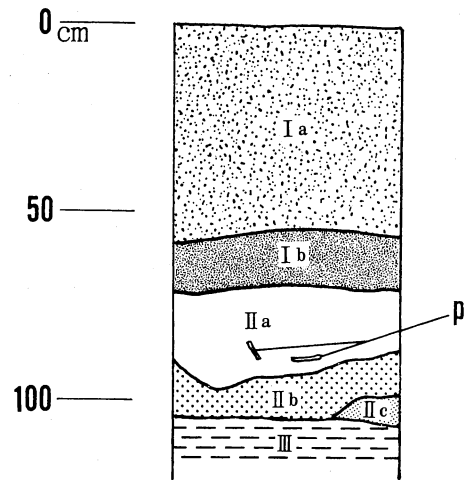
立ヶ花西原遺跡は千曲川が嵌入蛇行をはじめ入り口部分、東岸に形成された河岸段丘上面の南端部、中野市高丘立ヶ花西原地籍に所在し、南北350m、東西120mの範囲に位置する。今回の調査区は、遺跡のほぼ中央を東西に横断する県道中野豊野線の北側道路沿いに位置し、平成元・2年度における新立ヶ花橋取付道路用地内発掘調査及び平成5年度における住宅建築に伴う発掘調査が、隣接調査区において行われている。(第3図)

第3節 調査方法と基本層序

今回の調査は店舗建設基礎工事によって深掘される2m四方部分4か所のみ限った調査である。したがって、遺物の出土状況から住居跡等の遺構の存在が予測されたり、落ち込みが確認されたとしても、調査を終了し、工事によって影響を受けない部分はそのまま保存することとした。

以上のような調査のため、2m四方に掘削した部

分の壁を基本層序とした。(第4図)



第4図 基本土層図

第Ia層 表土 約30cmの土盛がされている。

第Ib層 茶褐色砂質土

第IIa層 黒褐色砂質土 やや粘質性があり、白い石の粒が含まれる。土器片を包含する。

第IIb層 黒褐色砂質土 粘質性がなく、白い石の粒が含まれず、土器片を包含する。

第IIc層 黒褐色砂質土 IIb層と同じであるが、5cm大の礫が混じる。

第III層 黄褐色砂質土 礫が混じる。

第Ⅱ章 遺構

今回の調査は該当敷地面積約780㎡のうち、遺跡破壊の恐れのある限られた範囲の合計約16㎡のため、遺構の確認はわずかに柱穴5か所にとどまった。遺物は検出されないが、第Ⅲ層に掘込まれており、第Ⅱa・Ⅱb層に縄文時代前期後半の遺物を包含していることから、縄文時代の遺構と思われる。

第Ⅲ章 遺物

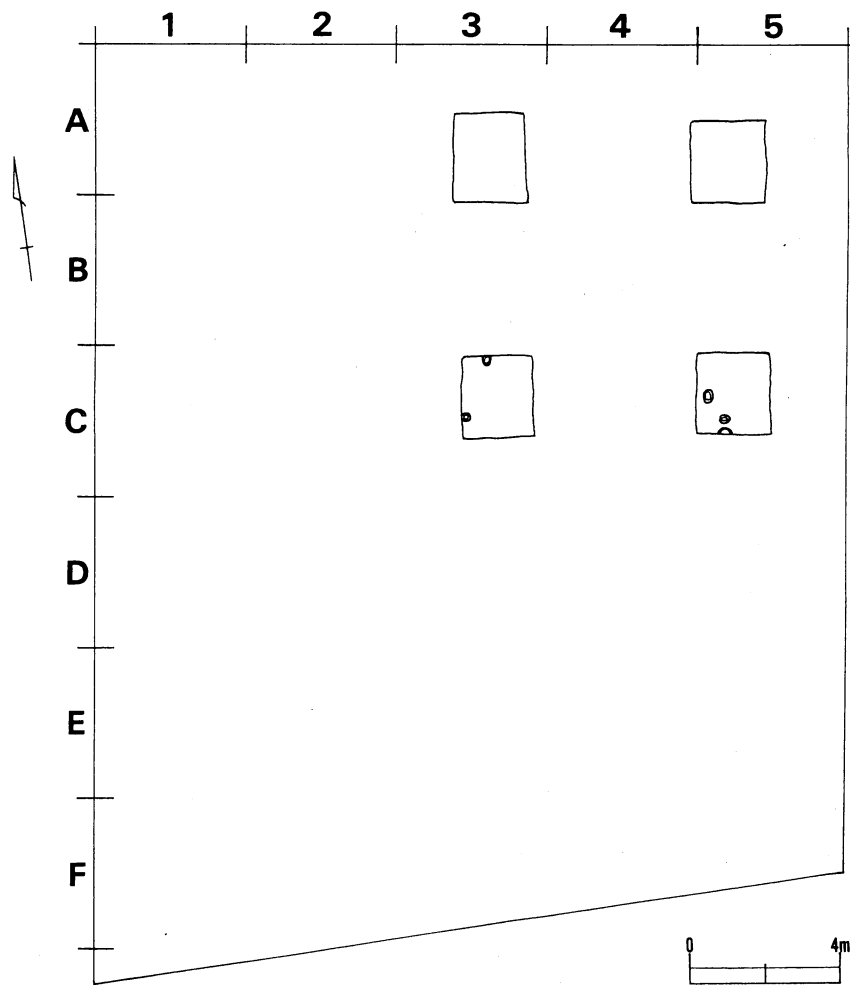
第1節 土器

① 第1群 (第6図1～56)

縄文のみで文様を施された土器である。1～7は口縁部である。器形の全体像は明らかではないが、口縁が緩く外傾ないしは外反する、単純な深鉢形土器であると思われる。6は口唇部に連続した棒状工具による刻みが施され、小波状をなす。8～56は胴部である。

② 第2群 (第7図57～60)

半截竹管による平行沈線文を施された土器である。57・59は菱形に施文され、57・58は沈線文の



第5図 グリッド配置図と調査部分

交点に円形竹管文が施されている。破片であるため、器形の全体像は明らかではない。

③ 第3群（第7図61～64）

爪形文を施された土器である。61・63は口縁部であるが、小破片であるため器形の全体像は明らかではない。

④ 第4群（第7図65～77）

縄文文様に横走る平行沈線文が施された土器である。65の口縁部は上端で内側へ緩く「く」字状に屈曲している。器形の全体像は明らかではないが、65は口縁部の形状から浅鉢形土器と思われる。

⑤ 第5群（第7図78～90）

集合沈線文を施された土器である。集合沈線文は半截竹管の平行沈線文によるものであるが、78・83・87は細い集合沈線文が直線的に施されている。破片であるため、器形の全体像は明らかではない。

⑥ 第6群（第7図91～95）

浮線文を施された土器である。地文には平行沈線文が施され、91は縦横に、92・93・95は円弧状に爪形文様の浮線文が施されている。破片であるため、器形の全体像は明らかではない。

している。裏表面に摩耗痕が認められ、敲打痕が各部に点在する。また3は器体中央部に凹孔を有している。

第2節 石器

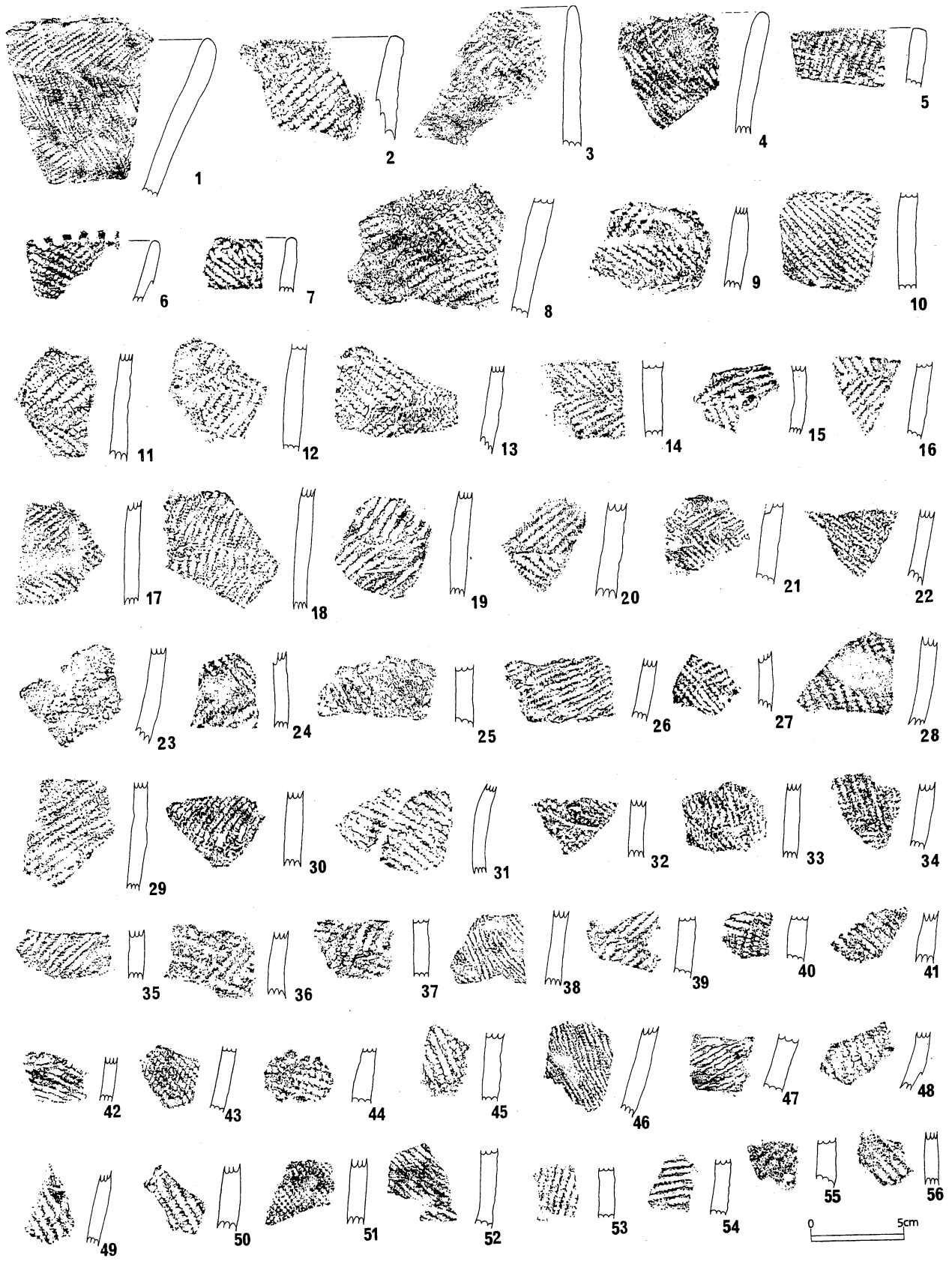
本遺跡からは、わずかではあるが4点の石器が検出されている。その内訳は、搔器1点、磨石3点である。

① 搔器（第7図1）

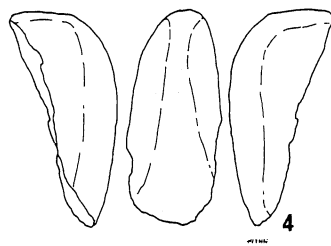
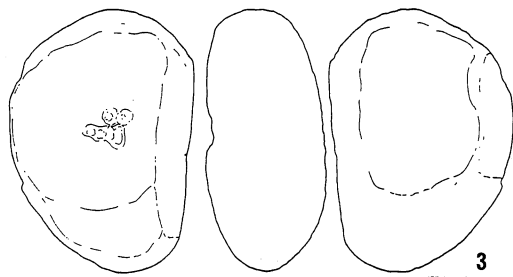
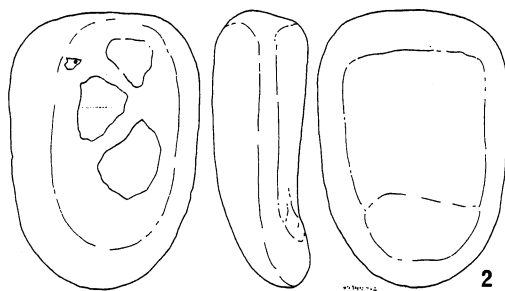
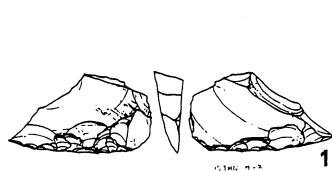
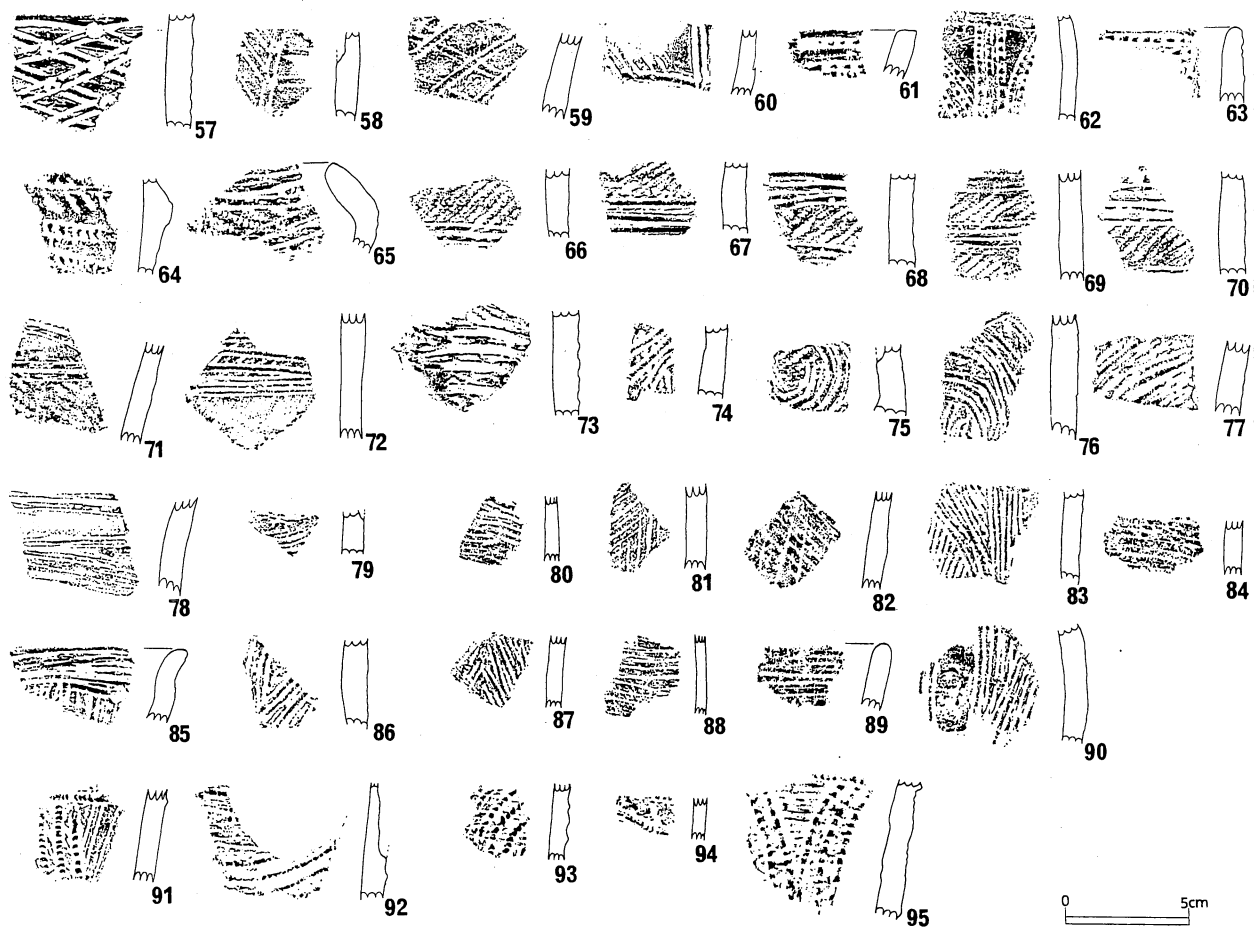
1点出土しており、石質は砂石である。素材に横長剥片が利用されている。下端の刃部は両面からの調整によって作出され、両側縁部は未調整である。

② 磨石（第7図2～4）

3点出土しており、大きさは拳大で、2・3は楕円形を、4は長円形を呈しているが半分を欠損



第6圖 遺物



第7图 遺物

立ヶ花西原遺跡
発掘調査報告書

印 刷 平成10年3月20日
発 行 日 平成10年3月20日
編 集 ・ 発 行 中野市教育委員会
中野市三好町1-3-19
印 刷 所 恒 栄 印 刷